

バージェス時代の多民族都市シカゴを 記憶する移民博物館

矢ヶ崎典隆・高橋昂輝

- I. はじめに
- II. バージェスの描いたシカゴ
- III. 移民の流入と移民街
 - (1) シカゴの発展と人口増加
 - (2) 1920年の多民族都市シカゴ
- IV. 移民博物館と移民文化の再生・発信
 - (1) 2000年の人口分布
 - (2) 移民博物館の立地と活動
- V. まとめ

I. はじめに

世界にはさまざまな博物館があり、それらは地域と時代を知るための手掛かりとなる。本稿が注目するのは移民博物館である。移民博物館は移民の歴史を記録する施設であるが、大きく分けると二つのタイプが認められる。一つは、移民送出地域に設立された移民博物館で、移民を送り出した歴史を後世に伝えることを目的とする。日本にはこのタイプの移民博物館がいくつかある。もう一つのタイプの移民博物館は、移民の移住先において移民エスニック集団によって組織されたもので、移民の存在を認識する役割を果たす。アメリカ合衆国には移民エスニック集団によって組織された移民博物館が多くあり、これらは多民族社会アメリカを象徴する存在である¹⁾。

アメリカ合衆国の都市のなかで、移民博物館の数が最も多いのがシカゴである。19世紀中頃から20世紀はじめにかけて、ヨーロッパなどから多くの移民が流入し、多様な人々はこの多民族都市の発展に貢献した。シカゴは中西部における社会と経済の中心地となり、今日、この国で第3位の人口を持つ大都市である。シカゴの発展と都市構造を説明するためには、移民に着目する必要がある。そして、今日のシカゴの移民博物館は、多くの移民集団の流入によって形成された多民族都市を象徴する存在であると考えられる。シカゴの発展過程において、移民エスニック集団は郊外に転出し、アメリカ社会に適応したが、現存する移民博物館は、20世紀はじめの多民族都市シカゴを理解するための手掛かりとなると考えられる。

本稿は、シカゴの移民エスニック集団によって運営される移民博物館を、19世紀後半から20世紀初頭までのシカゴの発展と多民族社会の枠組みに即して考察することを目的とする。すなわち、都市社会学者のバージェス(E. W. Burgess)が都市社会を研究した時代のシカゴを復原し、現存する移民博物館をその地域と時代の枠組みにおいて評価してみたい。図1は、本稿が対象とするシカゴの概要を示したものである。

キーワード：移民, 移民街, 移民博物館, シカゴ, バージェス

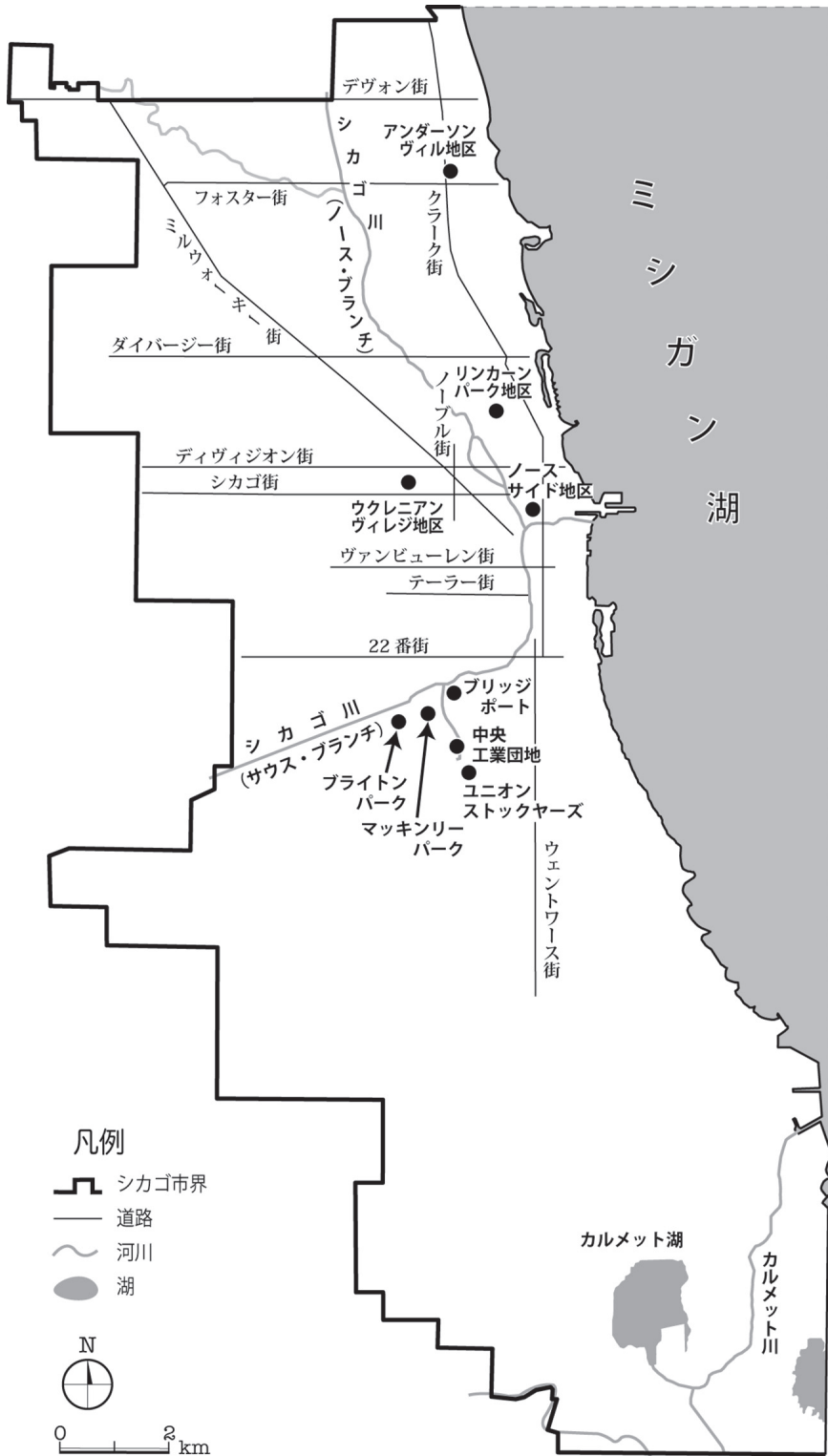


図 1 研究対象地域

II. バージェスの描いたシカゴ

20世紀のはじめにシカゴ大学の社会学者たちは、パーク (R. E. Park) の主導のもとで、バージェスやマッケンジー (R. D. McKenzie) を含めてシカゴの都市研究に取り組んだ。人間生態学の考え方に基づく彼らの都市研究は、シカゴ学派と呼ばれるようになった²⁾。なかでもバージェスの同心円地帯モデルは、地理学研究者の間で頻繁に引用される都市構造モデルである³⁾。シカゴ学派の都市研究を論じるためには、当時のアメリカ社会で展開した思潮と、シカゴという都市の地理について認識することが必要になる。

当時のアメリカ社会では社会進化論の考え方が普及しており、生物学の概念を援用して、都市は有機体と解釈された。また、この時代のアメリカ合衆国の都市は、産業の発達と人口増加によって急速に発展するとともに、さまざまな都市問題に直面した。都市の拡大は、内側の地帯の土地利用が外側に隣接する地帯に侵入することによって進行するものであり、この過程は植物生態学で研究された概念を援用して、遷移 (succession) と呼ばれた。そして、都市の成長に関する現象は、身体の物質合成代謝と分解代謝のプロセスという新陳代謝 (metabolism) に例えた、組織と解体の結果として理解することができる⁴⁾。

都市計画が実施されず、住民が市場経済のもとで最適な居住空間を求めて自由に行動し競争すると、所得によって居住空間が分離され、住み分けという現象が生じる。さらに、都市は人口流入によって空間的に拡大し、住民の属性や居住地区の魅力は常に変化する。そのため、住み分けの状況は一定ではない。バージェスは人間生態学の視点から、シカゴの居住地域分化を実証的に示した。興味深いことに、同時代のシカゴ大学の地理学者たちは、「人間生態学としての地理学」を唱えた

バローズ (H. H. Barrows) を含めて、自然地理学を基盤として、主に農村地域の変化に関する研究に取り組んでいた⁵⁾。

バージェスの都市の同心円地帯モデルは、成長する都市の構造とメカニズムを説明したものであり、それはシカゴの地域研究を基盤として構築された。このモデルはシカゴの現実を明らかにしており、産業の発展と移民の流入によって、農村社会から都市社会へという著しい変化を経験していたアメリカ都市の実像を的確に描写したものであった。バージェスが研究に取り組んだ19世紀末から20世紀はじめの都市を論ずる際には、電車と移民という二つの要素に注目する必要がある⁶⁾。

19世紀後半のアメリカ合衆国では、鉄道と路面電車が重要な交通手段であった。鉄道は長距離輸送の手段であり、都市と都市とを結ぶ交通機関として、また、東海岸と西海岸とを結ぶ交通機関として重要な役割を演じた。一方、路面電車は都市内部の公共交通機関として、また、都心部と郊外とを結ぶ公共交通機関として、人々の日常生活に欠かすことのできない存在であった。路面電車の郊外 (Streetcar suburbs) という表現があるように、電車路線に沿って郊外住宅地が形成された。

図2は、バージェスの同心円地帯モデルに、当時の電車路線 (System of Chicago Surface Lines) を重ね合わせたものである。シカゴでは1850年代末に鉄道馬車が登場したが、7万5千頭以上を数えたといわれる馬は、道路の破損や糞尿汚染の問題を引き起こした。1880年代に入るとケーブルカーが登場し、1890年代中頃までにはケーブルカーが普及して、シカゴは世界最大のケーブルカー網を有する都市となった。一方、1890年代に入ると路面電車の時代が始まった。1900年代中頃までにはシカゴの電車は路面電車に置き換わっており、路面電車網は市域の全域を覆った。そうした状況は、1928年のシカゴサーフェス

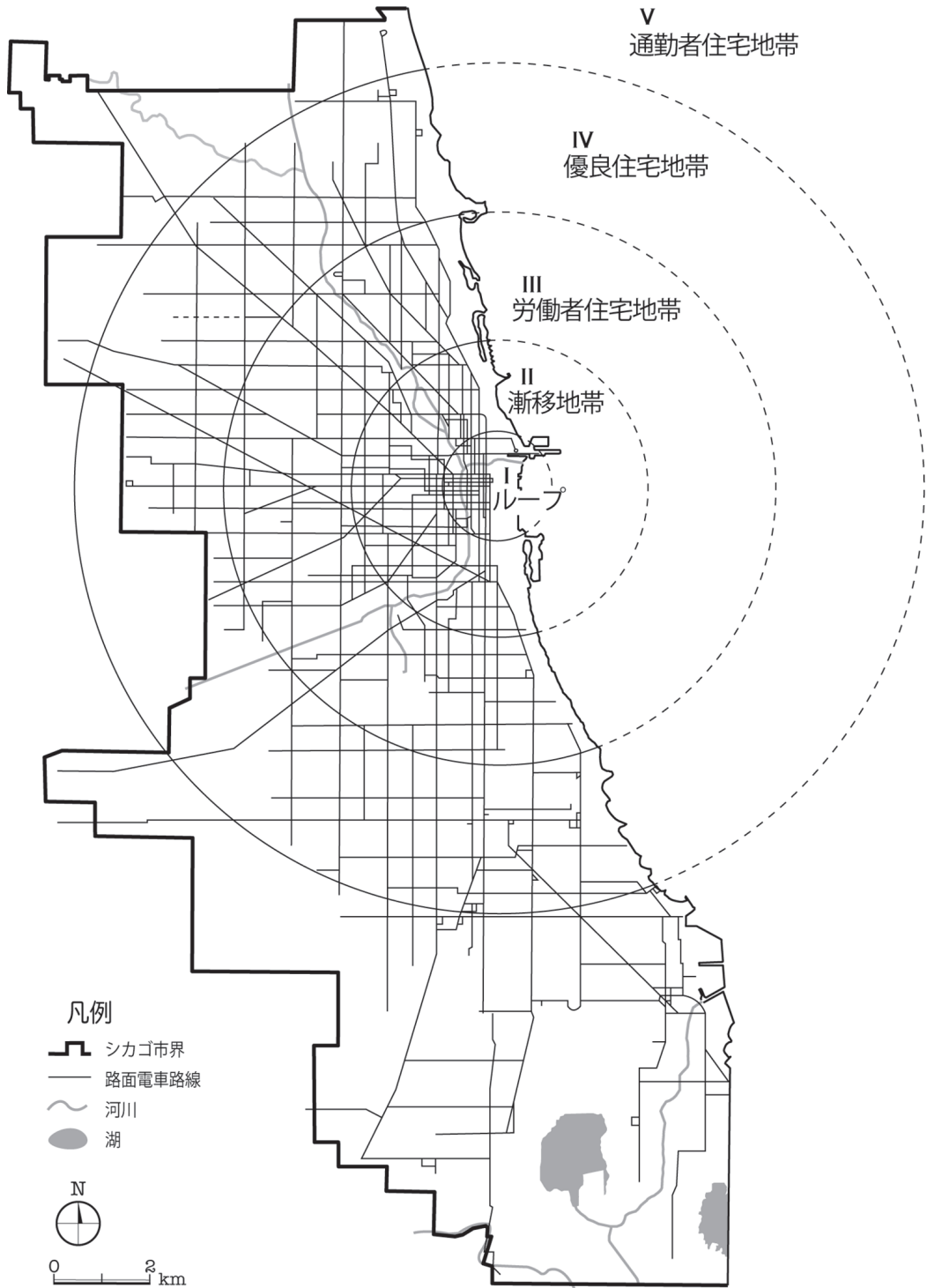


図2 1920年代のシカゴとバージェスの都市構造モデル

Burgess, E. W. "The growth of the city: An introduction to a research project," in Park, R. E. and Burgess, E. W., *The City*, The University of Chicago Press, 1925 および Holland, R. A., *Chicago in Maps*, Rizzoli International Publications, Inc., p. 132 により作成

ラインズ (Chicago Surface Lines) の路線網 (図2) から読み取ることができる。1914年に5社の電車会社が合併して誕生したシカゴサーフェスラインズは、当時、世界最大の電車路線網を持つ会社であったという⁷⁾。

都市機能が集積したのは中心業務地区 (Central Business District, CBD) で、シカゴではループと呼ばれた。ここは業務、行政、商業、そして社会的文化的な機能が集積する都市の核心部で、第1地帯を構成した。ループ地区で働く裕福なホワイトカラーの人々は、電車を利用して郊外の住宅地から通勤した。第5地帯の通勤者住宅地帯は、電車で30～60分で通勤が可能な地区で、庭付き一戸建て住宅で構成され、豊かなアメリカ社会の象徴となった⁸⁾。郊外の住宅地に住んで都心で働くという形態は、現代の日本のサラリーマンの生活を思い起こさせるが、日米の通勤者には本質的な違いがあった。

シカゴを語るうえでもう一つの要素は移民であった。アメリカ合衆国はイギリスをはじめとするヨーロッパ北西部からの移民が中心となって誕生した国であるが、その移民の出身地は時代とともに変化した。19世紀末から20世紀初頭にかけて、南ヨーロッパや東ヨーロッパからの移民が急増し、彼らは新移民と呼ばれるようになった。新移民は旧移民とは異なる文化を持っており、同じ白人でありながらも、偏見や差別の対象となった。彼らは低賃金で働く労働者として、工場の単純労働に従事した。英語を話すことができなくても、またアメリカ合衆国のことを知らなくても、都心周辺部には製造業を中心として、就業の機会が十分にあった。このような移民労働者は、シカゴの工業発展に重要な役割を演じた。

第1地帯の外側には漸移地帯 (第2地帯) が形成された。ここはもともと裕福な人々の住宅地であったが、都市の成長と工業化の進展にともなって工場が増加し、居住環境が悪化

した。漸移地帯の内側の地区は工場地帯であり、外側の地区はスラム (不良住宅地帯) であった。この住宅地は工場労働者を収容し、そこに暮らす住民の構成は多様であった。家賃が最も安い住宅地であるため、新たに流入した移民も多く住んだ。英語を話さない移民は、イタリア人街のリトルシシリーのように、リトル〇〇と呼ばれる移民街を作って生活した。ここでは、出身地で慣れ親しんだ生活文化を大きく修正しなくても生活することができた。また、アメリカ南部から移動してきたアフリカ系アメリカ人も多く、南部へ通じる鉄道駅の近くに黒人地区 (ブラックベルト) が形成された⁹⁾。

都市住民の移動性は高く、社会経済階層の上昇に伴って、人々は外側のより条件の良い住宅地帯へと転出した。新移民は単純労働者として都市の経済に吸収された。第3地帯は労働者住宅地帯で、工場や商店で働く労働者が家族で生活する住宅地帯であった。ドイツ系移民に代表されるように、ある程度の経済的成功をおさめた人々は、漸移地帯の不良住宅地区を脱出して、外側に隣接する労働者住宅地帯に移動した。ここでは住宅を比較的安価に入手することができた。このように、社会経済階層の上昇は、都市における居住地の外側への移動を伴った。こうした転出によって不良住宅地区には空き家が出たが、それらは新たに到着した移民によって占拠された。第3地帯の外側の第4地帯は優良住宅地帯であり、一戸建て住宅やグレードの高いアパートで構成された。このように、貧しい人々は都心部に近い住宅地に、豊かな階層の人々は都心から離れた住宅地に住むという一般的な傾向がみられた¹⁰⁾。

Ⅲ. 移民の流入と移民街

(1) シカゴの発展と人口増加

以上のようにバージェスが1920年代に描いたシカゴは、どのような経緯で形成されたの

であろうか。シカゴ市開発計画課がアメリカ独立二百年祭に合わせて刊行したシカゴ発展史¹¹⁾に依拠して、移民の流入に着目しながら、シカゴの発展を概観してみよう。

シカゴの歴史は、毛皮交易所や軍事目的の砦が建設された17世紀まで遡るが、都市としての整備が進んだのは1830年代のことであった。町が設立された1833年の人口は350人であった。2年後には3,265人に増加し、さらに1837年には市制が敷かれた。ヨーロッパからの移民が急増する一つの契機となったのは、1836年に始まったイリノイミシガン運河の建設であり、労働力需要の拡大ともなって、特にアイルランド人、ドイツ人、スウェーデン人、ノルウェー人が増加した。人口増加に伴って、製粉、醸造と蒸留、食肉加工、家具や馬車の製造をはじめとして、多様な産業が発展を開始した¹²⁾。

1848年に完成したイリノイミシガン運河は、アメリカ大陸の東西方向および南北方向の舟運を発展させた。ちょうどその頃、鉄道の時代が始まった。鉄道会社は移民の誘致に積極的で、交通の要衝としてのシカゴは、西部開拓の拠点としての重要性を増した。中西部やグレートプレーンズの開拓が進行するにつれて人口が急増し、シカゴは農産物の集散地、製造業の中心地としての地位を確立した。五大湖の水運がますます活発化すると同時に、1860年代に入ると、シカゴは世界最大の鉄道網の中心となった。このようなシカゴの発展は移民の流入を促した¹³⁾。

シカゴの人口は、1840年の約4,000人から、1850年の29,375人、1860年の109,260人に増加した。南北戦争が始まった当初、シカゴの経済は苦境に直面したが、この戦争はシカゴに特需をもたらし、産業の発展を促進した。シカゴは火器、弾薬、軍服の製造の中心地となったし、食料品の供給の拠点となった。綿織物、食肉加工、印刷、製鉄、衣料品、農業機械製造なども発展した。戦争が終結すると

好景気も終わりを迎え、帰還した軍人は仕事を見つけることが難しかった。それでも、シカゴの人口は1870年には298,977人を数えた。南北戦争はシカゴへの移民の流入を抑制することはなかった¹⁴⁾。

図3は、1870年におけるシカゴ市および周辺地域(1920年の市域の範囲)における人口分布を示したものである。実線で示された市域は、ループ地区から6 km以内の範囲にある。ここに、西ヨーロッパ・北ヨーロッパ系(薄いグレーで表示)、および南ヨーロッパ・東ヨーロッパ系(濃いグレーで表示)の集住地区が存在した。

最大の移民集団はドイツ人であった。1860年に22,230人を数えたドイツ生まれの人口は、1870年には52,318人に達した。ドイツ人の集住地区は、主にループ地区の北側でシカゴ(ノースブランチ)川の東側に存在した。ドイツ人はシカゴとイリノイ州の産業、政治、文化、宗教に重要な役割を演じたことで知られる。なお、ユダヤ人は最初にドイツ人の大量の移住に伴ってドイツから到来し、ループ地区に集住した¹⁵⁾。

アイルランドの大飢饉が1848年に最悪となると、多くのアイルランド人が大西洋を越えてアメリカ合衆国に渡った。シカゴのアイルランド生まれの人口は、1850年の6,096人から1860年の19,889人へ増加し、1870年には39,988人を数えた¹⁶⁾。アイルランド人はシカゴ(サウスブランチ)川の右岸に沿ったブリッジポート、マッキンリーパーク、ブライトンパークなどの地区に集住した。

北欧系もシカゴの人口を構成する重要な人々であった。主にシカゴ(ノースブランチ)川に沿って集住地区が形成され、それは製粉所、工場、鉄道操車場などの職場に近接していた。スウェーデン人は、1860年の816人から1870年の6,154人に急増し、アメリカ最大のスウェーデン人社会を形成した。1860年代にノースサイド地区にスウェードタウンが形

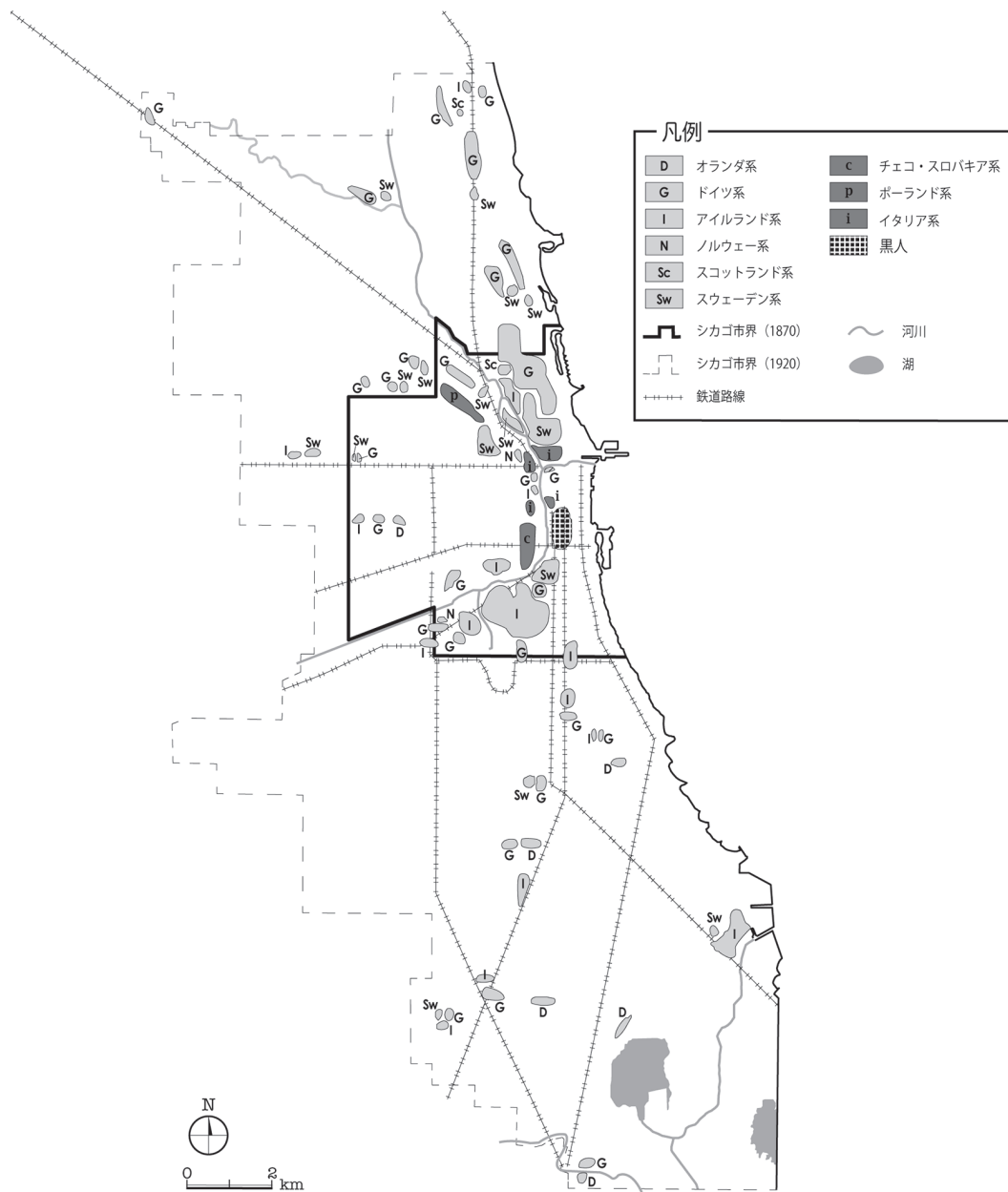


図3 シカゴの人口分布 (1870年)

Department of Development and Planning, City of Chicago, *Historic City: The Settlement of Chicago*, City of Chicago, 1976 により作成

成され、それはディヴィジョン街 (Division St.) とシカゴ街 (Chicago Ave.) に挟まれた地区に立地した。また、ノルウェー人は、1860年の1,313人から1870年には6,374人に、デン

マーク人は、1860年の150人から1870年の1,243人に増加した¹⁷⁾。

オランダ人は1850年代に市域の南方に小規模な農業集落を形成した。その後、鉄道建設

に伴って、カルメット湖の北側に鉄道建設労働者の居住地が形成された¹⁸⁾。

東ヨーロッパ系および南ヨーロッパ系の人々は19世紀末から急増するが、1870年の時点でも、若干の小規模な集住地区が存在した。ポーミア人あるいはチェコ人（センサスというポーミア人にはスロバキア人やモラヴィア人が含まれた）は6,277人を数え、ループ地区の南西でシカゴ（サウスブランチ）川の北に集住した¹⁹⁾。ポーランド人は1860年には109人であったが、1870年には1,205人に増加し、ミルウォーキー街（Milwaukee Ave.）とディヴィジョン街（Division St.）の周辺に集中した²⁰⁾。1850年代後半に、イタリア人の最初の地区は、シカゴ（サウスブランチ）川の南岸にある、旧アイルランド人地区に形成された。1860年センサスによると、イタリア系人口は100人程度であったが、19世紀末にイタリア人移民が大量流入するまで安定した²¹⁾。1870年には、ループの西と北にイタリア人の小規模な集住地区が存在した。

なお、アフリカ系人口の増加は1840年代に始まり、シカゴは奴隷制度廃止運動の一つの拠点となった。1860年のアフリカ系人口は955人であったが、1870年には3,691人を数え、今日のループ地区の南側、シカゴ川右岸に集中した²²⁾。

1871年10月8日の夜にシカゴ大火が発生した。強風にあおられて、火災は36時間にわたって続き、シカゴの人口の3分の1が住居を失った。しかし、復興は急速に進んだ²³⁾。すぐに住宅が再建され、都心の外側の地域で人口が急増したし、郊外に移転する工場も現れた。シカゴ大火から1920年代初頭までの半世紀の間に、シカゴの産業は発展し、人口は増加し、市域は拡大し、都市景観は変化した。

産業発展の一つの契機となったのは、1905年に開設された中央工業団地（Central Manufacturing District）であった。これは、アメリカ合衆国で最初に計画的に建設された工業団

地で、家畜収容施設ユニオンストックヤーズの北に位置する広大な区画を占めた。当時、シカゴはアメリカ合衆国の食肉産業の中心に成長しており、スウィフトアンドカンパニーなどの食肉工場で処理された食肉は冷蔵され、鉄道貨車で広域に出荷された²⁴⁾。中央工業団地とユニオンストックヤーズを含めて、物流を担ったのはシカゴジャンクション鉄道であった。設立の10年後には、中央工業団地には200社に及ぶ工場や流通関連施設が集積し、ユニオンストックヤーズと合わせて、約4万人の労働者が働いたという²⁵⁾。

シカゴの人口は、1870年の298,977人から、1900年の1,698,575人へ増加した。ヨーロッパからの移民と彼らのアメリカ生まれの子どもたちは、1900年までには全人口の4分の3余りを占めた²⁶⁾。1850年代と1860年代に流入した移民の子どもたちは、鉄鋼、食肉、衣料品、家具、運輸、不動産などの産業の発展に伴って中産階層を形成し、郊外住宅地に立派な住宅を建設した²⁷⁾。一方、新たに到着した外国生まれの移民は、過酷な労働条件のもとで低賃金労働に従事した。彼らの住宅環境は劣悪で、地下室や下水処理や水道もない木造住宅が一般的であった。しょうこう熱、ジフテリア、コレラなどの病気が多くの住民の命を奪ったし、大気や水の汚染も深刻であった²⁸⁾。

シカゴの発展に伴って都市景観も変化した。1870年代には、3～4階建てのアパートがシカゴに初めて登場した。フラットと呼ばれたアパートは人気を集め、フラットブームが生まれた。1883年だけでも1,142軒のアパートが建設され、それらは鉄道や路面電車の路線に沿って密集した。こうして1880年代に郊外人口が増加した。都心部では、1884年にデザインされた10階建ての高層ビルの建築を契機として、摩天楼の都市景観が形成された。シカゴはシカゴ学派の建築様式で有名になった²⁹⁾。さらに、1893年の5月から10月にかけて

て開催された世界博覧会 (World's Columbian Exposition) は、シカゴの歴史に残る重要な出来事であり、シカゴを世界的に有名にした。

この間にシカゴ市は周辺の地域を併合して、市域面積が拡大した。1870年から1900年まで、市域は35平方マイルから190平方マイルへと増加した (1889年には125平方マイルを獲得した)。新たな郊外住宅地の形成に伴って、都心部から郊外へと住民が移動した。計画的な住宅地開発が行われ、高級住宅地が形成された。分散した住宅地は路面電車と道路により結びつけられた。19世紀末が近づくにつれて、移民の構成が変化した。ドイツ人、アイルランド人、スカンジナビア人、イギリス人に代わって、ポーランド人、ロシア人、イタリア人、ボヘミア人、ギリシャ人が数で上回るようになった³⁰⁾。

(2) 1920年の多民族都市シカゴ

図4は1920年におけるシカゴの人口分布を示しており、バージェスが研究した時代のシカゴを概観することができる。移民集団の集住地区が、市域の全域にモザイク状に分布することがわかる。工業地区はシカゴ (ノースブランチ) 川とシカゴ (サウスブランチ) 川に沿って、また、南東部のカルメット川に沿って帯状に分布した。バージェスも認識していたように、漸移地帯を構成した工場地区は決して同心円状には分布してはおらず、河川や鉄道という交通路の影響を強く受けていた。バージェスは地理学者ではなかったので、現実の土地利用をモデル化することを目指したわけではなかった。

1870年と同様に、ドイツ系はシカゴで最大の集団であり、1900年にはドイツ生まれのドイツ人は170,738人を数えた。アメリカ生まれの子どもを含めると、ドイツ系人口は428,201人で、これはシカゴの人口の4分の1を上回った。1920年にはドイツ生まれの人口は112,288

人で、彼らの多くが1910年までにアメリカ合衆国にやってきた人々であった。1910年には、徴兵と戦争により海外への移住が不可能になっていた。1920年にはアメリカ生まれのドイツ系人口は421,443人に達した³¹⁾。

ドイツ系の最大の集住地区はシカゴ (ノースブランチ) 川の東側で、ダイバージー街 (Diversey Ave.) とデヴォン街 (Devon Ave.) の間の地区であった。また、シカゴ (ノースブランチ) 川の西側にも南北にドイツ系集住地区が存在したし、ループ地区の北側とリンカーンパーク地区にもドイツ系集住地区が存在した。これらの地区に加えて、ドイツ人の小さな集住地区が市域の全体に分布した。

アイルランド生まれの人口は1870年には4万人を数えたが、1920年にはアイルランド生まれの人口とアメリカ生まれの二世を合わせて200,000人を数えた。これらの人口は、アメリカ生まれの三世や四世を含めたアイルランド系社会の一部を構成するのみであった³²⁾。古くからの集住地区は、シカゴ (サウスブランチ) 川の南のブリッジポートからブライトンパークの地区であった。アイルランド系は、この地域を離れて南に移動し、集住地区は広域化と分散化を経験した。

北欧系の集住地区も広範囲にわたって分布した。1920年にはスウェーデン系人口は121,326人で、そのうち58,563人が外国生まれであった。ノルウェー系人口は44,961人で、そのうちの20,481人が外国生まれであった。デンマーク系人口は22,615人で、そのうちの11,268人が外国生まれであった³³⁾。最も大きな人口を有したスウェーデン系の集住地区は広範囲にみられたが、クラーク街 (Clark St.) とフォスター街 (Foster Ave.) の交わる地区に、大きな集住地区が存在した。

1870年のシカゴの人口分布と比較すると、1920年の人口分布の顕著な特徴は、東ヨーロッパ系および南ヨーロッパ系の集住地区の存在である。1870年代にビスマルクによる反

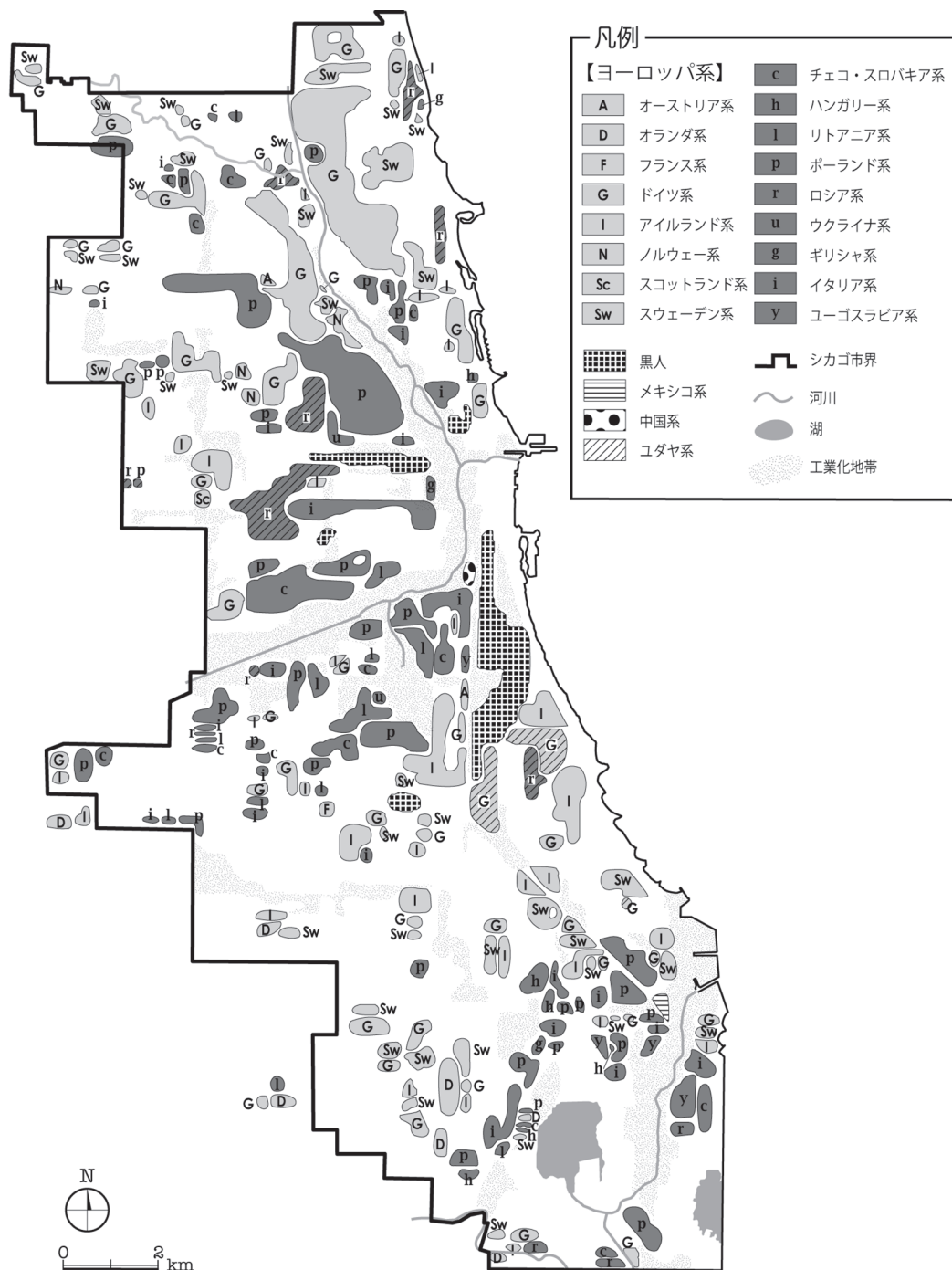


図4 シカゴの人口分布 (1920年)

Department of Development and Planning, City of Chicago, *Historic City: The Settlement of Chicago*, City of Chicago, 1976 により作成

ポーランド人および反ユダヤ人の政策により、また、経済的苦境により、多数のポーランド人が母国を後にした。彼らはシカゴにも流入し、当時は2,000人にも達していなかった同胞に合流した。1900年には、ポーランド生まれの人口は59,713人を数えた。ポーランド生まれの人口とアメリカ生まれのポーランド系二世を合わせると、シカゴはワルシャワに次いでポーランド人の多い都市となった。1920年には、ポーランド生まれの人口は137,611人に達し、ポーランド人を親に持つポーランド系二世の人口は350,000人を超えたものと推計された³⁴⁾。

ポーランド系集住地区は、ミルウォーキー街とノーブル街 (Noble St.) の交わる地区を起点として、人口増加に伴って、ミルウォーキー街に沿って北西方向に拡大を続けた。また、ポーランド系集住地区はシカゴ (サウスブランチ) 川の南側と北側にも、またカルメット湖の北側にも急速に発展した。

ウクライナ人についてみると、1900年代の初めに移民が増加し、1920年には8,403人を数えた。ヨーロッパから直接シカゴにやってきたウクライナ人もいたし、東部で、主に石炭地域で労働した後、シカゴに再移住した人々もいた。ウクライナ人移民はもともと農民であり、オーストリアハンガリー帝国の支配地域の出身者であった³⁵⁾。ウクライナ人の集住地区は、ループ地区の西側に形成された。

リトアニア人は20世紀の最初の10年間にシカゴに流入し続けた。そして、1920年にはシカゴのリトアニア生まれの人口は18,923人を数えた³⁶⁾。リトアニア系の集住地区は、シカゴ (サウスブランチ) 川の南側にあるユニオンストックヤーズや製鉄工場などの職場に近接して立地した。

チェコ人とスロバキア人は、1920年には50,392人を数えた³⁷⁾。シカゴ (サウスブランチ) 川の北側と南側に集住地区が存在した。

また、ハンガリー人は1900年の7,463人から1920年にかけて急増し、ハンガリー生まれの人口26,106人を含めて、70,209人を数えた。これらの数字には、ハンガリー系ユダヤ人やハンガリー系ドイツ人が含まれていた³⁸⁾。多くのハンガリー人が鉄道操車場や製鉄工場働き、南部地区に集住した。

1870年から1900年にかけてシカゴのユダヤ系人口は急増した。それは、ポーランド系とロシア系のユダヤ人が、貧困と迫害を逃れるためにアメリカ合衆国に移住したためであった。共通言語はロシア語でもポーランド語でもドイツ語でもなく、イディッシュ語であった³⁹⁾。ユダヤ人の集住地区はループ地区の北方、西方、南方に形成された。

初期のイタリア人移民は比較的豊かな北部地域の出身者であったが、1880年代と1890年代には、移民の主な出身地は貧しい南部およびシチリア島に移った。イタリア生まれおよびアメリカ生まれのイタリア系人口を合わせると、1900年には27,250人であったが、1920年には124,184人を数えた⁴⁰⁾。古くからのイタリア系集住地区はループ地区の北に存在したが、シカゴ (ノースブランチ) 川に沿って北方へ拡大した。西方では、古くからの集中地区は西に拡大した。これらに加えて、小規模なイタリア系集住地区が市域全域に分布した。

アメリカ合衆国へのギリシャ人移民は、トルコとの戦争などにより、1890年代に増加した。1900年のギリシャ人口は1,493人であったが、1920年には15,539人のギリシャ人移民とその子どもたちがいた⁴¹⁾。ギリシャ人集住地区はループ地区の西方のシカゴ (サウスブランチ) 川の西に存在した。

中国人の小規模な社会はループ地区に1880年代に形成された。彼らは中国からサンフランシスコ経由でシカゴに到来し、鉄道労働に従事した。最初のチャイナタウンはクラーク街に沿ってヴァンビューレン街 (Van Buren St.)

の南に形成された。ここが過密となり、またループ地区の業務機能の拡大の影響を受けて、1912年頃に中国系実業組織が南方のウェントワース街(Wentworth Ave.)と22番街(22nd St.)の地区に土地を購入し、2番目のチャイナタウンが誕生した。1920年には、外国生まれの中国人は1,647人を数えた⁴²⁾。

20世紀に増加した移民集団としてメキシコ系があげられる。第一次世界大戦中に、小さなメキシコ系集住地区が形成された。ただし、図4から明らかなように、メキシコ系は1920年のシカゴにおいて目立つ存在ではなかった。

アフリカ系人口は1910年代後半に急増した。この時期に50,000人がシカゴに到来したと推計され、1920年のアフリカ系人口は109,458人を数えた。アメリカ南部における害虫による綿花の不作、低い綿花価格、洪水による被害が、人々を押し出す要因として働いた。一方、軍需産業の需要が増大するなかで、第一次世界大戦を契機としてヨーロッパからの大量移民時代が終了し、労働力不足が深刻化した。シカゴの鉄道や製鉄所が代理人を派遣して南部で労働者を調達し、シカゴに到来したアフリカ系住民は、南部からのさらなる人口移動を促進した。1920年代にはヨーロッパからの移民は50,000人を数えたが、南部諸州からシカゴに到来したアフリカ系は120,000人を超えた。その後もアフリカ系人口は増加を続けた⁴³⁾。

以上のように、1920年頃のシカゴは、農村社会から都市社会へ移行するアメリカ社会を象徴した。農村では農業機械の普及により労働力需要が減少した一方、都市では工場労働に対する需要が増大し、賃金労働者を必要とした。昔ながらのコンパクトシティは電車網の拡大によって郊外化し、自動車の新たな出現によって、路線網の間の空間が到達可能となった。

19世紀後半に移住した移民一世の人口は減

少し、アメリカ生まれの人口が増加した。アメリカ生まれの人々は、経済状況が向上すると、郊外に新たに開発された住宅地に移動した。19世紀末から増加した東ヨーロッパや南ヨーロッパからの新移民は、ヨーロッパでの戦争の影響を受けて、また1924年移民法の影響を受けて減少した。一方、労働力不足を補うべく、南部からのアフリカ系アメリカ人の流入が顕著になった。さらに、図4には示されない多くの少数派の移民エスニック集団も存在し、シカゴの多民族社会を特徴づけた。

IV. 移民博物館と移民文化の再生・発信

(1) 2000年の人口分布

バージェス時代のシカゴは、その後1世紀近くの間に着しい変化を経験した。この間に起きた大恐慌、ニューディール、第二次世界大戦、ベトナム戦争、公民権運動、移民法改正、産業構造の変化、情報通信技術の発達などは、シカゴを大きく作り変えた。2000年の人口分布を示した図5は、センサストラクト単位で数的に優位の民族集団を示したものである。図4の1920年の分布図と比較対照すると、80年間に生じたシカゴの人口の変化を理解することができる。

アフリカ系アメリカ人は、1920年にはループの南に南北に延びるブラックベルトを形成した。しかし、2000年になると、アフリカ系アメリカ人の居住地域は面的に拡大して、市域南部の全域を占める。1920年に西ヨーロッパ・北ヨーロッパ系および南ヨーロッパ系および東ヨーロッパ系の移民街が文化島のように混在したこの地域は、アフリカ系アメリカ人によって占拠されている。また、ループの西側に帯状に存在したアフリカ系アメリカ人地区も西方に拡大して、市域の西端まで達した。この地域に居住したイタリア人、ロシア系ユダヤ人、アイルランド人、ドイツ人、スコットランド人、スウェーデン人などの住民は郊外へ移動した。アフリカ系アメリカ人

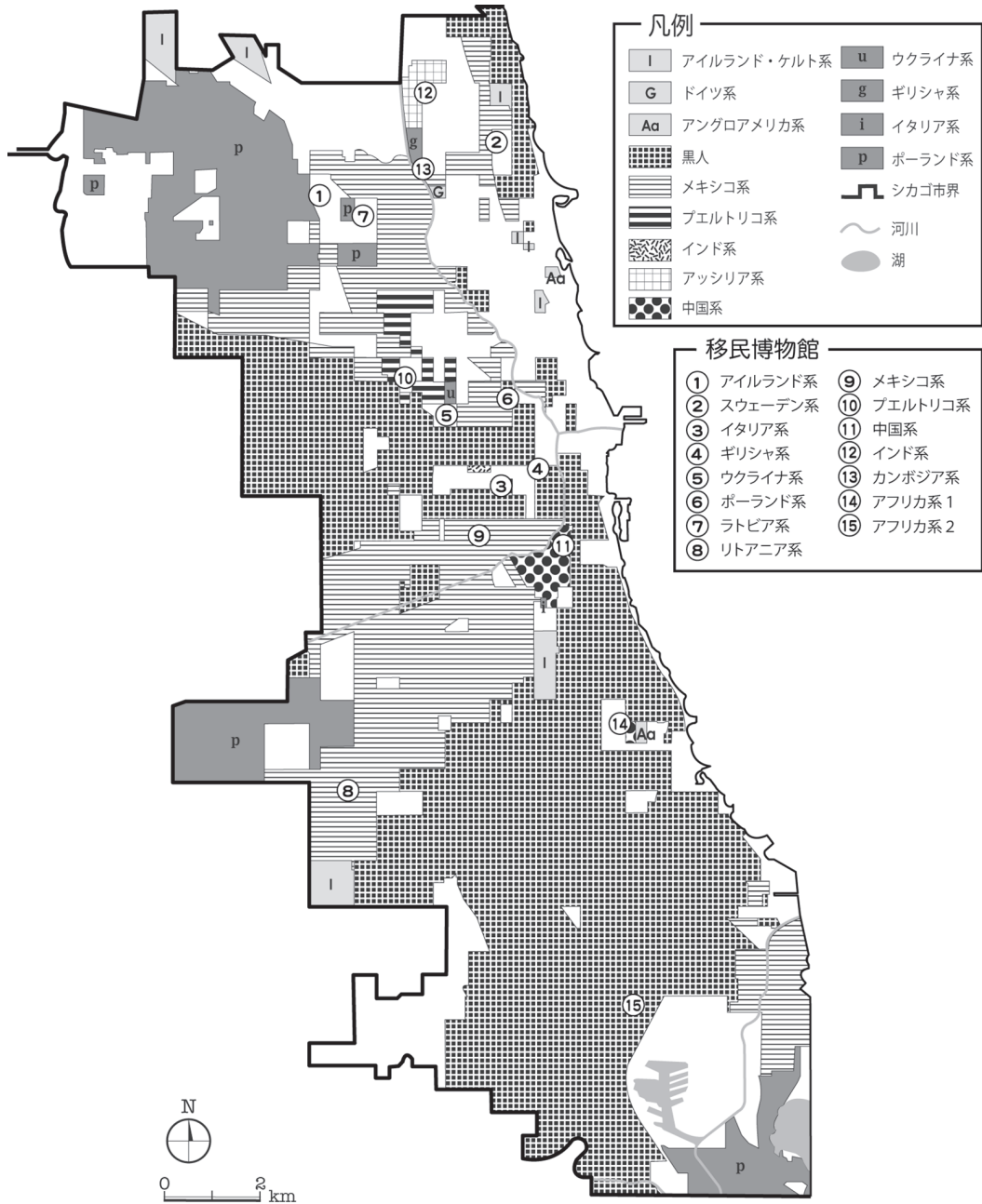


図5 シカゴの人口分布（2000年）と移民博物館

民族集団の分布は、Grossman, J. R., Keating, A. D., and Reiff, J. L. eds., *The Encyclopedia of Chicago*, The University of Chicago, 2004により作成

は、市域北部のミシガン湖岸にも新たな集住地区を形成する。アフリカ系アメリカ人は1930年代から増加を続け、2000年には100万

人を超えて、シカゴ市総人口の37%を占めた。

2000年におけるもう一つの主要な集団はメキシコ系である。メキシコ人は1920年には市

域南東部のカルメット湖の北東に小さな移民街を形成するのみであったが、2000年にはカルメット川河口部に広域に居住する。また、ループ地区から南西方向に、シカゴ(サウスブランチ)川に沿ってメキシコ系居住地区が広がる。この地区は1920年には工場集積地区であり、工場労働者の居住地域であったが、メキシコ系集住地域に変わった。この過程で、ポーランド系、イタリア系、リトアニア系、チェコ系、ウクライナ系、ドイツ系などの移民街はいずれも姿を消した。一方、ループから北西方向に、アフリカ系アメリカ人居住地区の北側に、メキシコ系居住地区が形成された。特にポーランド人の移民街はメキシコ系居住地区となった。メキシコ系を含めたヒスパニック人口は、2000年にはシカゴの総人口の26%を占めた。

一方、1920年の移民街を今日まで維持してきた集団も存在する。中国系は、ループ地区の南でシカゴ(サウスブランチ)川が北に流れを変える右岸に、2番目のチャイナタウンを形成したが、中国人の流入に伴ってこのチャイナタウンが拡大した。また、ループ地区から北に向かい、ミシガン湖に臨むリンカーンパークの西には、ベトナム人街とニューチャイナタウンが新たに形成された。

ヨーロッパ系集住地区のなかで、1920年代からの継続が認められるのはポーランド系である。1920年に存在した最大のポーランド人移民街は、ループ地区から北西に向かってミルウォーキー街沿いに広域に存在した。この地域は、今日ではメキシコ系、プエルトリコ系、そして多民族混住地区である。ポーランド系は郊外化して、市域の北西部に大きな地域社会を形成する。また、ループ地区の南西方向では、シカゴ川南岸の市境界線に隣接した地区にもポーランド系集住地区が存在する。

その他のヨーロッパ系については、ウクライナ系が、ループ地区の西北西に小さな集住

地区を維持している。また、アイルランド系は、チャイナタウンの南に、昔からの集住地区を維持している。

以上のように、1920年と2000年の人口分布図を比較対照することにより、多民族都市シカゴの変化を理解することができる。すなわち、シカゴは、数多くのヨーロッパ系移民集団によって構成される多民族都市から、アフリカ系アメリカ人や、メキシコ系を中心とするヒスパニックによって空間的に支配される多民族都市へと変化した。最新の2010年センサスによると、270万人を数えるシカゴの総人口のうち、アフリカ系アメリカ人とヒスパニックを合計すると、実に62%に達した。

(2) 移民博物館の立地と活動

このような多民族都市シカゴを読み解く鍵となるのは、移民エスニック集団が設立し運営する移民博物館である。表1に示されるように、シカゴ市内には13の移民博物館が存在する。それらの位置は、図5に①～⑬で印した。これらの他、エスニック博物館として、アフリカ系アメリカ人関係の博物館が2か所ある(図5の⑭と⑮)。

移民エスニック集団と移民博物館との間には、密接な関係の存在を読み取ることができる。今日の集住地区に移民博物館が立地するのは、ウクライナ系と中国系である。シカゴ全米ウクライナ博物館(Ukrainian National Museum of Chicago)は、ウクレニアンヴィレッジ地区にある(図5の⑤)。設立は1952年で、シカゴの移民博物館のなかでは2番目に長い歴史を持つ。この博物館は、故国を去ることを余儀なくされた学者たちによって、慈善家や活動家の支援を受けて、ウクライナの歴史を記録し伝統を継承するために建設された。

2階建ての立派な建物(図6)には、1階にアートギャラリーが、2階に伝統文化の展示室が設けられている。2014年の調査時には、

表1 シカゴの移民博物館

集団および名称		開館年*	立地
ポーランド系	Polish Museum of America	1937	⑥ 旧ポーランド人街
ウクライナ系	Ukrainian National Museum of Chicago	1952	⑤ ウクレニアンヴィレッジ
リトアニア系	Balzekas Museum of Lithuanian Culture	1966 (1986)	⑧ 旧移民街に近接
スウェーデン系	Swedish American Museum	1976 (1986)	② 旧スウェーデン人街
イタリア系	National Italian American Sports Hall of Fame	1977 (2000)	③ リトルイタリア
ラトビア系	Latvian Folk Art Museum	1978	⑦ 多民族混住地区
メキシコ系	National Museum of Mexican Art	1987 (2001)	⑨ メキシコ系集住地区
アイルランド系	Irish American Heritage Center	1991	① 多民族混住地区
ギリシャ系	National Hellenic Museum	1992 (2011)	④ グリークタウン
プエルトリコ系	National Museum of Puerto Rican Arts and Culture	2000	⑩ プエルトリコ系集住地区
カンボジア系	National Cambodian Heritage Museum & Killing Fields Memorial	2004	⑬ 多民族混住地区
中国系	Chinese-American Museum of Chicago	2005	⑪ チャイナタウン
インド系	Indo-American Heritage Museum	2008	⑫ 多民族混住地区

*カッコ内は現建物への移転の年次
 現地調査および各博物館のホームページにより作成



図6 全米ウクライナ博物館
 2014年9月、筆者撮影

ウクライナの女性画家MIKA (1911~2000年)の作品がアートギャラリーに展示されていた。2階の展示室には、ウクライナの地図、民族衣装、人形、建築模型、楽器、伝統的彩色を施したイースターエッグなどが展示される。また、1932-1933年ウクライナ人集団虐殺に関する展示室もある。図書館と文書館も設けられており、ウクライナやシカゴのウクライナ人社会に関する貴重な資料等が保管さ

れている。

この博物館の北側の街区を占めるのは、ウクライナ系教会とウクライナ文化センターである。そしてこの街区の北側を東西に延びるシカゴ街 (Chicago Ave.) に沿って、ウクレニアンヴィレッジのパナーが目につくとともに、ウクライナレストランが何軒かある。ウクライナ系人口は分散したが、ウクライナ人移民の流入は続いている。ウクライナ語による週刊新聞 (英語名は *Ukrainian Weekly Newspaper*) がシカゴの西郊のホフマンエステーツで刊行されている。教会、文化センター、レストラン、商店、銀行などとともに、シカゴ全米ウクライナ博物館はシカゴのウクライナ系社会の中核をなす存在である。

チャイナタウンにはシカゴ中国系アメリカ人博物館 (Chinese-American Museum of Chicago) がある (図5の⑪)。チャイナタウン100周年を記念してチャイナタウン商業会議所によって作成されたパンフレット (*Chicago's Chinatown Celebrating 100 years 1912-2012*) によると、中国系人口の増加に伴って、チャ

イナタウンの30街区には10,000人の中国人が居住し、400軒のビジネスが存在する。さらに広域なチャイナタウン地区全体には27,000人の中国系が居住するという。この移民博物館は2005年に開館し、2008年の火事で多くの展示品を失ったが、2010年に再開にこぎつけた。

博物館の入口近くには寄付者の名簿が陳列され、1階は中国の伝統的な年間の祭りに関する展示でにぎやかな雰囲気を作り出す。2階には中国人移民の歴史に関する展示があり、移住に関するビデオが視聴できる。中国人人口の増加に伴ってチャイナタウンは活気に満ちており、チャイナタウン商業会議所が作成した案内パンフレット (*Chicago Chinatown Visitors Guide*) から、エスニック資源を観光化することへの中国人社会の意欲を十分に読み取ることができる。

住民の郊外化が進行して1920年に存在した移民街は消滅したが、旧移民街の一角に移民博物館が立地するタイプは、スウェーデン系、ポーランド系、ギリシャ系、イタリア系である。

ループ地区の北に位置するアンダーソンヴィル地区はもともとスウェーデン人街の一つであったが、今日は多民族混住地区である(図5の②)。スウェーデン系アメリカ人博物館 (Swedish American Museum) は1976年にクラーク街に面した小規模な施設で開館し、10年後に道路の反対側の現在の建物に移動した。近くにはスウェーデン系のレストランや居酒屋がある。もともとスウェーデン人経営の金物店だった建物には十分なスペースがあり、スウェーデン人移民の歴史に関する常設展示 (*A Dream of America: Swedish Immigration to Chicago*) のほか、現代のスウェーデン人芸術家の作品を展示するギャラリー、図書館、教室、売店などを完備している(図7)。また、年間を通して様々な行事が開催されるし、機関誌 *Swedish American Museum*



図7 スウェーデン系アメリカ人博物館
2014年2月、筆者撮影

Flaggan が季刊発行される。

アメリカポーランド人博物館 (Polish Museum of America) は、ループ地区の北西、ミルウォーキー街に沿って広域に存在した旧ポーランド人移民街⁴⁰の南東端部に位置する(図5の⑥)。1913年に築造されたこの建物には、Polish Roman Catholic Unionと大きく刻まれている(図8)。この建物内に、1935年にアメリカポーランド系ローマンカトリックユニオン博物館文書館 (Museum and Archives of the Polish Roman Catholic Union of America) が設立され、2年後に博物館の一般公開が始まった。シカゴの移民博物館のなかで最も古い歴史を持つ。



図8 アメリカポーランド人博物館
2014年9月、筆者撮影

この建物に博物館、図書館、文書館、売店が入っている。博物館の歴史は1階の一連のパネルで解説される。2階は、音楽家でアメリカとポーランドの懸け橋となったパデレウスキ (Ignacy Paderewski) に関する展示がある。3階はもともとホールであったが、主な展示室が2階から移動した。ここには文化に関する展示に加えて、1945年のワルシャワ進軍に関する写真が展示され体験ビデオを視聴することができる。ポーランド系住民は郊外化したがるが、100年以上も前に建設されたこの建物が、ポーランド系の歴史を今にとどめている。定期刊行物として、英語による *Polish Museum of America Newsletter* が発行される。また、Polish Roman Catholic Union of America は英語とポーランド語による *Polish Nation* を月刊で定期刊行している。

ループ地区に最も近接して立地する移民博物館は、全米ギリシャ博物館 (National Hellenic Museum) である。ハルステッド街に沿ってグリークタウンと呼ばれるギリシャ人街があり、主にギリシャレストランが軒を連ね、ギリシャ国旗がはためく⁴⁵⁾。かつてのギリシャ人移民街は、今日ではギリシャレストラン街としてシカゴ市民や観光客の人気を集める。この歴史的ギリシャ人街に2011年竣工のモダンな博物館がある (図9)。この博



図9 全米ギリシャ博物館
2014年9月、筆者撮影

物館はもともと Hellenic Museum and Culture Center として1983年にダウントウンに設立され、1992年に博物館が一般公開された。2階はギリシャとギリシャ系アメリカ人に関する展示室で、1階には広い売店がある。ここには図書館・文書館も併設される。屋上から眺めるシカゴの摩天楼は格別である (図5の④)。

ループ地区の西方で東西に延びるテラー街 (Taylor St.) に面して、全米イタリア系アメリカ人スポーツ殿堂 (National Italian American Sports Hall of Fame) がある。この地区にはもともとユダヤ人が多く居住したが、19世紀末にイタリア人移民が増加してイタリア人街となった⁴⁶⁾。イリノイ大学と大病院に挟まれたこの地区は、イタリア系人口が減少した現在もリトルイタリアーとして知られ、イタリアレストランが軒を連ねる。この博物館はもともとボクシング殿堂として1977年に設立されたが、翌年、あらゆるスポーツを含む殿堂としてシカゴ市の西に隣接するエルムウッドパークに設立された。

イタリア系社会を象徴するリトルイタリアーの現在の建物に移転したのは、2000年のことであった (図5の③)。この新しい博物館の1階と2階には、野球、ボクシング、アメリカンフットボールなど、スポーツで活躍したイタリア系の人々とそうした人々にゆかりの品物が展示される。充実した展示は、スポーツにおけるイタリア系の活躍が再認識させられるし、アメリカ合衆国のイタリア系社会をつなぐ絆はスポーツだとも確信できる。道路を隔てて北側にある小さな公園には、ジョー・ディマジオ (Joe DiMaggio) がこの殿堂に向かってフルスウィングする像が建っている (図10)。

住民の郊外化が進行したが、1920年の移民街に近接して移民博物館が立地するのは、リトアニア系のバルゼカスリトアニア文化博物館 (Balzekas Museum of Lithuanian Culture)



図10 全米イタリア系アメリカ人スポーツ殿堂
2014年9月、筆者撮影

である。シカゴ(サウスブランチ)川の南岸にはかつてユニオンストックヤーズと食肉工場があり、多くのリトアニア人が働いた。アプトン・シンクレアが1906年に発表した小説『ジャングル』は食肉工場での過酷な労働について語り、大きな反響を引き起こした⁴⁷⁾。現在の移民博物館は、かつてのリトアニア人移民街の南西に位置する(図5の⑧)。

この移民博物館は、1966年にスタンレー・バルゼカス Jr. が個人所蔵の貴重な地図、甲冑、芸術品などをもとにして開館し、その後、展示品が増加した。1986年にサウスプラスキ街(South Pulaski Road)に面した旧病院の大きな建物を購入して移転した(図11)。



図11 バルゼカスリトアニア文化博物館
2014年2月、筆者撮影

広々とした展示室に加えて、アートギャラリー、図書館、教室、ホール、売店、子ども博物館など、施設は充実している。アメリカ合衆国におけるリトアニア文化、芸術、歴史、リトアニア語の維持発展が目的であり、教室ではリトアニアを紹介するビデオを視聴できる。リトアニアへの研修旅行を企画し、ジャーナル(*The Lithuanian Museum Review*)の発行も行う。2006年には博物館設立40周年を記念した小冊子(*The 40th Anniversary Report of the Balzekas Museum of Lithuanian Culture*)が刊行された。また、*The Lithuanian Museum Review*が定期刊行されている。

多民族混住地区に移民博物館が立地するヨーロッパ系タイプとして、アイルランド系とラトビア系があげられる。アイルランド系アメリカ人遺産継承センター(Irish American Heritage Center)はループ地区の北西郊外の住宅街にあり、1920年のドイツ人集住地区に立地する(図5の①)。堂々とした建物は、1924年に中等学校として築造されたもので、1960年代からコミュニティカレッジとして利用されたが、1985年にこの団体が購入した。1991年に博物館が、2006年には図書館が開館した。ここには博物館と図書館のほか、文書館、高齢者用給食プログラムのための厨房、ギフトショップ、バー・食堂とダンスフロアを備えたメンバーズクラブ、講堂、体育館を改造した大きなホールがある(図12)。アイルランド語教室、音楽教室、絵画教室も定期的に開催される。博物館には移民関係の展示はなく、アイルランドの伝統文化に関して寄付されたものが展示される。

なお、ラトビア系については、シカゴラトビア協会(Chicago Latvian Association)によってラトビア民族芸術博物館(Latvian Folk Art Museum)が運営されている(図5の⑦)。

20世紀後半に移民の流入に伴ってエスニック人口が増加し、集住地区が形成され、そこに移民博物館が立地するタイプも存在する。



図12 アイルランド系アメリカ人伝統継承センター
2014年9月、筆者撮影

それらは、メキシコ系の全米メキシコ芸術博物館 (National Museum of Mexican Art) とプエルトリコ系の全米プエルトリコ芸術文化博物館 (National Museum of Puerto Rican Arts and Culture) で、いずれも芸術や文化をテーマとする。

前述のとおり、メキシコ系人口は現在のシカゴにおいて広域に分布する。この博物館はループ地区の南西のメキシコ系居住地区に位置する (図5の⑨)。この地区を歩くと壁画が目につき、メキシコ系住民が多いことを景観的に理解することができる。プエルトリコ系移民博物館は、プエルトリコ系住民の集住地区にあるフンボルト公園の一角を占める (図5の⑩)。これらの移民エスニック集団の場合、移民の歴史が新しい。そのため、移民博物館は移民の歴史を残すことよりも、芸術や文化に焦点を当てて、本国との現代的なつながりを重視することを目的として運営される。

移民集住地区は顕著ではないが、20世紀後半の移民の流入に伴ってエスニック人口が増加し、移民博物館が形成されたタイプもある。一つはインド系のインドアメリカ遺産継承博物館 (Indo-American Heritage Museum, 図5の⑫) である⁴⁸⁾。もう一つは、カンボジア系の全米カンボジア遺産継承博物館および集

団虐殺記念館 (National Cambodian Heritage Museum & Killing Fields Memorial, 図5の⑬) である。両者とも多民族混住地区に立地する。カンボジア系移民博物館は、その名称が示す通り、クメールルージュによるカンボジア人集団虐殺の記念館を併設している。

V. おわりに

シカゴを論じる際に、この大都市を構成する多様な人々と、特色のある地区については関心が払われてきた⁴⁹⁾。しかし、シカゴに存在する移民博物館に注目して、多民族都市を論ずる試みはなされてこなかった。本稿では、移民博物館に光を当ててシカゴを検討した結果、次のような結論を得た。

ヨーロッパ系移民博物館は、19世紀から20世紀初めまでの移民の歴史と、20世紀初めに繁栄した移民街の記憶を留める機能を果たしている。すなわち、バージェスが描いた1920年代のシカゴの移民社会を、今日の移民博物館が記憶しているのである。一方、1970年代以降に増加したヒスパニックやアジア系の移民博物館には、最近の移民の流入と母国との現代的なつながりが集約されている。いずれにせよ、多民族都市シカゴの過去と現在は、移民博物館に注目することによって論ずることができる。

なお、シカゴの移民博物館にはもう一つの特徴がみられる。それは、移民博物館が世界と結びついており、アメリカ合衆国以外の地域で起きた出来事が、この国の移民博物館に記録されるということである。

シカゴ全米ウクライナ博物館には、1932-1933年に起きたウクライナ人集団虐殺に関する資料が展示される。スターリンのソ連政府によって1千万人以上のウクライナ人が意図的に餓死させられたとする展示は、豊かな穀倉地帯における隠された歴史を記録するものである。ウクライナ飢餓集団虐殺財団 (Ukrainian Genocide Famine Foundation, Inc.)

が作成したパンフレット (*Holodomor: The Secret Holocaust in Ukraine 1932-1933*) が用意されている。すなわち、ウクライナで起きた歴史上の事件が、アメリカ合衆国に住むウクライナ系の人々によって認識され、ウクライナ系移民博物館に記録されている。

なお、シカゴ全米ウクライナ博物館の前にある教会には、最近のウクライナでの戦争における戦没者を慰霊するモニュメントがある。これは、シカゴのウクライナ系社会がウクライナとのつながりを維持していることを示すものである。

また、全米カンボジア遺産継承博物館および集団虐殺記念館は2004年に開館した。この博物館の母体となったのは1976年設立のイリノイ州カンボジア協会 (Cambodian Association of Illinois) で、カンボジア系難民に対する社会的サービスを提供してきた。カンボジアの文化と伝統をシカゴに存続させることがこの新しい移民博物館の目的である。併設される集団虐殺記念館は、キリングフィールドで命を落とした200万人ともされる人々を追悼する記念碑である。追憶の壁にはカンボジア人の犠牲者の名前が刻まれ、追憶の日の追悼式典も毎年開催される。カンボジアで起きた歴史的な事件を、アメリカ合衆国で記憶しようとする意図が存在する。

アメリカ全体をみると、ユダヤ系の移民博物館が最も多いが、シカゴ市内にはユダヤ系移民博物館はない。しかし、市域の北に隣接するスコーキーにはユダヤ系人口が集住し、ユダヤ人の集団虐殺をテーマとしたイリノイ州ホロコースト博物館および教育センター (Illinois Holocaust Museum & Education Center) がある。

1930年代から1940年代にかけてナチの迫害を逃れて多くのユダヤ人がヨーロッパからアメリカ合衆国に渡り、シカゴにもユダヤ系人口が増加した。スコーキーはユダヤ系人口の集住地区として知られるようになった。1978

年にシカゴのネオナチ集団がスコーキーで反ユダヤデモを行う企画をたてると、それまで沈黙を守ってきたユダヤ人は団結して立ち向かった。この事件を契機として1981年にホロコースト記念財団 (Holocaust Memorial Foundation) が設立され、小さなホロコースト博物館が開館した。これを母体として、2009年に現在の立派な博物館が開館した。展示、図書館、ツアーが充実しており、広報と教育の場を提供している。

以上のように、シカゴの移民博物館は、バージェス時代のシカゴの移民と移民街を記憶している。同時に、移民博物館は、移民の流入する現代のシカゴと、移民の出身地とを結びつける存在でもある。さらに、世界で起きた事件がシカゴの移民博物館に記録されている。それぞれの移民集団は、移民博物館を通して、自らの文化や歴史を発信している。

(日本大学、

日本大学・院・日本学術振興会特別研究員)

〔注〕

- 1) 矢ヶ崎典隆「移民博物館」(山下清海編著『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会—日本の多民族化に向けたエスニック・コンフリクト研究—』明石書店、2016)、53-58頁。
- 2) Park, R. E. and Burgess, E. W., *The City*, The University of Chicago Press, 1925. パーク, R. E. バーゼス, E. W. 著, 大道安次郎・倉田和四訳『都市—人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会, 1972。
- 3) Burgess, E. W. "The growth of the city: An introduction to a research project," in Park, R. E. and Burgess, E. W., *The City*, The University of Chicago Press, 1925, pp.47-62.
- 4) Park, R. E. "The city: Suggestions for the investigation of human behavior in the urban environment," in Park, R. E. and Burgess, E. W., *The City*, The University of Chicago Press, 1925, pp.1-46.
- 5) 矢ヶ崎典隆「カール・サウアーの地理教育

- 論—セミナーとフィールドワークによる地理学者養成—」新地理61-2, 2013, 1-28頁。
- 6) 矢ヶ崎典隆「都市構造からみたアメリカ合衆国の地理」新地理56-1, 2008, 38-43頁。
- 7) Holland, R. A. *Chicago in Maps*, Rizzoli International Publishing, Inc., 2005, pp.130-132.
- 8) 前掲3)。
- 9) 前掲3)。
- 10) 前掲3)。
- 11) Department of Development and Planning, City of Chicago, *Historic City: The Settlement of Chicago*, City of Chicago, 1976.
- 12) 前掲11) 8-10頁。
- 13) 前掲11) 18-19頁。
- 14) 前掲11) 27頁, 34頁。
- 15) 前掲11) 35-36頁。
- 16) 前掲11) 35頁。
- 17) 前掲11) 37頁。
- 18) 前掲11) 26頁。
- 19) 前掲11) 35頁。
- 20) 前掲11) 36頁。
- 21) 前掲11) 22頁。
- 22) 前掲11) 36頁。
- 23) Grossman, J. R., Keating, A. D., and Reiff, J. L. eds. *The Encyclopedia of Chicago*, The University of Chicago Press, 2004, p. 297.
- 24) Pacyga, D. A. *Slaughterhouse: Chicago's Union Stock Yard and the World It Made*, The University of Chicago Press, 2015. Horowitz, R. *Putting Meat on the American Table: Taste, Technology, Transformation*, The Johns Hopkins University Press, pp.27-31.
- 25) 前掲23) 124頁。
- 26) 前掲11) 46頁。
- 27) 前掲11) 43頁。
- 28) 前掲11) 44頁。Ward, D. *Poverty, Ethnicity, and the American City, 1840-1925*, Cambridge University Press, 1989, pp.61-63.
- 29) 前掲11) 43-44頁。
- 30) 前掲11) 46頁。
- 31) 前掲11) 49頁, 66頁。
- 32) 前掲11) 46頁, 68頁。
- 33) 前掲11) 71頁。
- 34) 前掲11) 47頁, 67頁。
- 35) 前掲11) 76頁。
- 36) 前掲11) 73頁。
- 37) 前掲11) 72頁。
- 38) 前掲11) 75頁。
- 39) 前掲11) 51-52頁。
- 40) 前掲11) 52頁, 69頁。
- 41) 前掲11) 58頁, 75頁。
- 42) 前掲11) 58頁, 77頁。Ling, H. *Chinese Chicago: Race, Transnational Migration, and Community since 1870*, Stanford University Press, 2012.
- 43) 前掲11) 70頁, 84頁。
- 44) Granack, V. in Association with the Polish Museum of America, *Chicago's Polish Downtown*, Arcadia Publishing, 2004.
- 45) Ganakos, A. *Greekwotn Chicago: Its History-Its Recipes*, G. Bradley Publishing Inc., 2005.
- 46) Catrambone, K. and Shubart, E. *Taylor Street: Chicago's Little Italy*, Arcadia Publishing, 2007.
- 47) アプトン・シンクレア著, 大井浩二訳『ジャングル』松柏社。
- 48) ただし, この移民博物館はこの場所から移転し, 移転先については未確認である。
- 49) たとえば, 次のような書籍がシカゴの多様性を論じている。Holli, M. G. and d'A. Jones, P. eds., *Ethnic Chicago: A Multicultural Portrait*, William B. Eerdmans Publishing Company, 1977. Keating, A. D. ed., *Chicago Neighborhoods and Suburbs: A Historical Guide*, The University of Chicago Press, 2008. Linton, C. ed., *The Chicago Area Ethnic Handbook: A Guide to the Cultures and Traditions of Our Region's Diverse Communities*, Chicago Area Ethnic Resources, 2012.

Immigration Museums depicting Multiethnic Chicago at the time of E. W. Burgess

YAGASAKI Noritaka and TAKAHASHI Koki

Immigration museums provide geographers with the means to depict a region and a time period. There are two types of immigration museums: One is to keep a record of emigration history in the place of origin and the other is established by an immigrant group in the host society for the purpose of enhancing ethnic identity and solidarity. While immigrant groups in the United States have established immigrant museums, Chicago is characterized by thirteen immigration museums. Chicago grew as a multiethnic city from the mid-nineteenth century through the beginning of the twentieth century due to the development of transportation and industries and to the influx of immigrants from Europe. When E. W. Burgess studied Chicago in the early 1920s from the viewpoint of human ecology, the Midwestern city was experiencing a social change from rural to urban society, urban growth with diverse immigrant quarters, and suburbanization based on streetcar lines and automobiles. Comparing the map of ethnic groups in 1920 with the one in 2000, geographic changes are observed that took place during the eighty-year period. Although most immigrant quarters existed in 1920 disappeared as ethnic population became suburbanized, immigrant museums exist in the locale where immigrant quarters once existed. This suggests that immigrant museums play a role in recording and remembering the memory of immigrant quarters that flourished at the beginning of the twentieth century. New groups of immigrant that increased since the 1970s also establish and manage immigration museums in Chicago, providing the means to maintain the tie with their native places. Our case study in Chicago suggests that immigration museums are keys to understand multiethnic America.

Key words: Immigrants, Immigrant quarter, Immigration museum, Chicago, E. W. Burgess